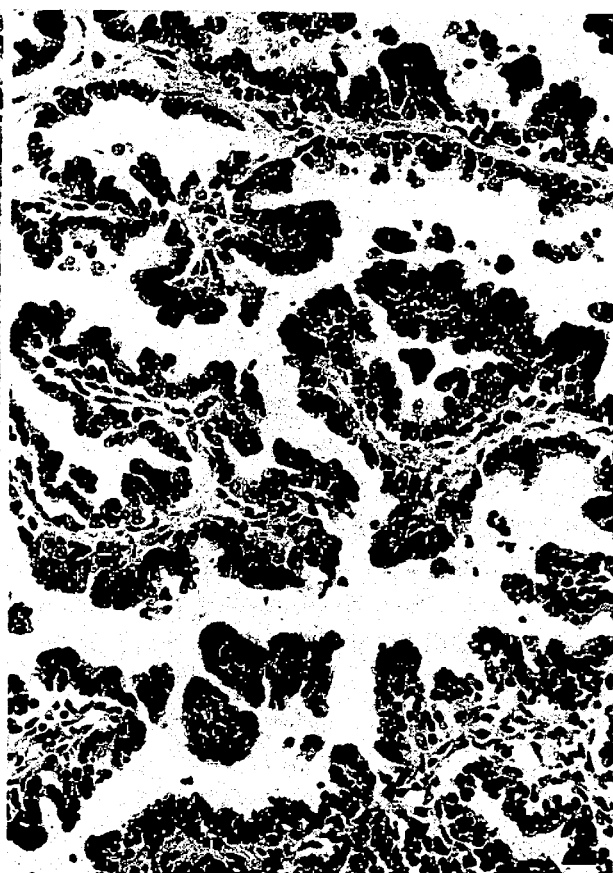
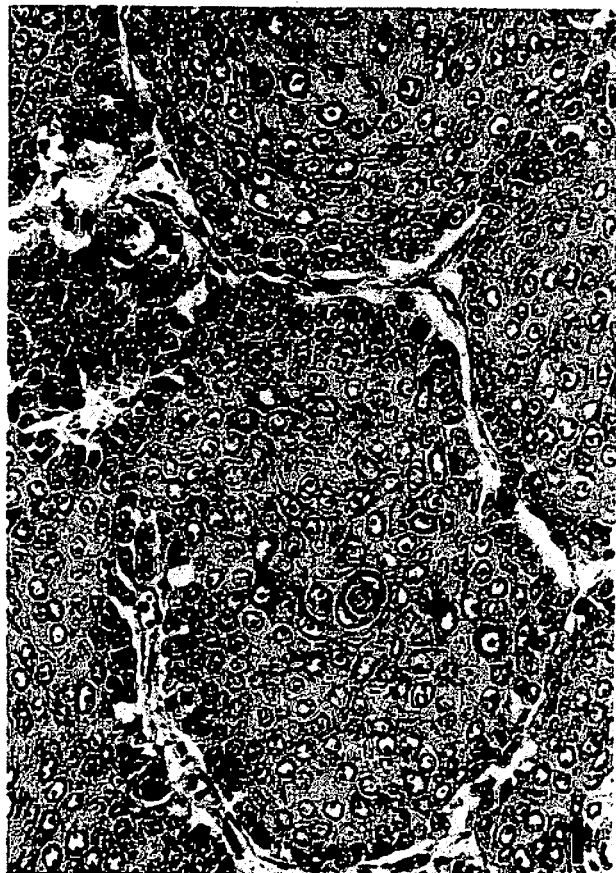


イヌの肺

東京大学農学部家畜病理学教室出題 第25回獣医病理学研修会標本No.430



動物：オールド・イングリッシュ・シープ・ドッグ、雌，14歳。

臨床歴：1977年(7歳)；左肩甲部の腫瘤(径約15cm)を摘出，扁平上皮癌と診断された。以後，治療を行ない局所の再発はなかった。1979年；肛門囊炎で再診。左胸部皮下(径約5cm)および右第4乳腺部皮下(径約2cm)に，1978年来の腫瘤があるとのことで針生検，脂肪腫と診断。1984年5月13日(14歳)；発作性発咳と子宮蓄膿症で再診。X線で左肺後葉に腫瘤(径約3cm)1個を認めた。6月25日，斃死。

剖検所見：左肺は退縮不良で，後葉に腫瘤(径約4cm)1個，前葉には多数の小腫瘤(3~8mm)が散在，剖面は黄緑色で脆弱。心・腎・脾にも同様の腫瘤(径0.5~2cm)を多数認めた。左胸部皮下(径約8cm)，右第4乳腺部および右胸部背側皮下(各径約4cm)に腫瘤を認め，剖面は白色脂肪様。子宮内膜に囊胞(径3mm)多発。

組織所見：1個の肺腫瘤の中に扁平上皮癌と腺癌が併存，コレステリン沈着をともなう広範な壊死もみられた。

扁平上皮癌部では，敷石状に配列した腫瘍細胞塊間に間質が介在して蜂巢状を呈し，癌細胞巢中心部に向かって層状の角化進行，癌真珠形成がみられた(写真1，HE，×240)。腫瘍細胞は大型，核小体明瞭で多数の核分裂像を示し，明らかな細胞間橋が認められた。電顕所見では細胞質内のケラチン線維，デスモゾームが観察された。腺癌部では，腫瘍細胞は円柱形で，扁平上皮癌部に較べ小型で，細胞質はより好酸性を示し，核もやや基底膜側に偏り，核分裂像はほとんどみられなかった。1~数層の乳頭状発育を示し(写真2，HE，×240)，粘液産生はみられなかった。気道性，リンパ行性，ときに血行性の肺内転移像がみられ，心・脾・腎・小脳の毛細血管内にも腫瘍細胞がみられた。なお，皮下における白色脂肪様塊は脂肪腫であった。

診断：7年前に摘出した皮膚の扁平上皮癌は，長期間再発がみられなかったことから，肺腫瘍は原発性の腺扁平上皮癌と診断された。